

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】上村 知春

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】エチオピア・アムハラ州における健康観と医療実践に関する医療人類学的研究

## 【研究の目的】(400字程度)

現代アフリカの農村において、近代医療の浸透とともに、病気や健康に対する人びとの実践に選択の幅が広がる状況が多くみられる。先行研究は、人びとの病気に対する実践を災因論や宗教・呪術的な信仰などをつうじて理解しようとするものと、生物医学に基づく近代医療の影響や導入の効果を中心にしたものに大別できる。後者の研究では、医療実践において「伝統」と「近代」とが対立的に検討される傾向にあった。しかしじっさいには、人びとはそのような枠組にとらわれず、必要におうじて医療の方法を選択する。

本研究は、エチオピア・アムハラ州の農村における人びとの医療実践を明らかにすることを目的に、病気治療に重点を置いた先行研究を発展させ、予防、健康維持・促進にまで視点を広げて調査を実施する。とくに、健康・病気に深い関わりのある食生活に焦点を絞り、日常の食事と健康・病気に対する人びとの認識との対応に留意しながら、広義の医療実践に注目する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

エチオピア北西部アムハラ州西ゴッジャム県 E 村において 2017 年 9 月から 11 月および 2017 年 12 月から 2018 年 2 月までの約 4 ヶ月間フィールドワークを実施した。

1 世帯を対象に、2017 年 10 月から 11 月および 2017 年 12 月から 2018 年 2 月までの 70 日間、食事の様子を観察と聞き取りをおこない、食事内容、材料、作り方、摂取頻度を記録した。その結果、日々の食事に香辛料が多用されていること、発酵食品の摂取頻度が高いことが明らかになった。地域住民 3 名に対して、香辛料やハーブの方名、効能、利用方法を聞き取り、実際の利用を観察した。複数の香辛料を材料にして作られるペースト状の調味料(チャウ)と、自家製チーズと香辛料を練り混ぜた副食(マタタイプ)について、用いられる香辛料・ハーブの種類を調べ、それらの食材に関する日常会話を記録した。発酵食品の醸造酒(タツラ)と蒸留酒(アラキ)の作り方について観察と聞き取りをおこなった。観察では、インフォーマントが口頭で回答しにくい内容や、意識せずにとる行動に注目し、聞き取り結果と対応させて分析した。

香辛料は、主食(インジェラ)、副食(ワット)、調味料、コーヒーとあわせて供される食材(ヤ・ブンナ・コルス)の材料として頻繁に用いられるだけでなく、薬としての用途があることがわかった。薬とそれ以外の食材としての加工方法が同一の事例が多くあったが、用途によって、異なる意味づけがされていた。たとえば、チャウとマタタイプに共通して加えられるニンニク、ヘンルーダ(*Ruta chalpensis*)、コリアンダーは、それぞれ、風邪薬、邪視祓い薬、回虫駆除薬としても認識されていた。

インジェラ、タツラ、ヨーグルト(ウルゴ)、チーズ(アイブ)、アラキなど、日常食を構成するものの多くが発酵食品であった。人びとは発酵を常に健康に結びつけて認識しているわけではないが、食品には一定の意味づけがおこなわれていた。たとえば、シコクビエ、トウモロコシ、オオムギ、ゲシヨ(*Rhamnus prinoides*)を原料として家庭ごとに醸造される酒(タツラ)は、水分補給、社交、薬、農耕儀礼の供物等さまざまな側面があり、それぞれの用途についての人びとの語りは心身の健康と直接的・間接的に関連づけられていた。

## 【結論・考察】(400字程度)

現地の主食・主飲料の原料であるシコクビエや、香辛料・ハーブに含まれる成分の効能は栄養学的・薬学

的に評価されている。地元の人びとの健康認識は、科学的に証明されている内容と部分的に重なり合いながらも、摂取する環境や愛着と結びついて独自に形成されていた。シコクビエを例にとると、人びとはこれを自ら手間暇かけて栽培、収穫、調理する。完成品である飲食物に対してのみならず、そこに至るまでの過程で彼らが口にする語りのなかにも見逃すことのできない表現が含まれていた。日常の食生活は、在来の知識に基づく基本的かつ重要な医療実践である。今回の調査をつうじて、彼ら自身が高い価値を置く飲食物の認識と内容を明らかにすることができた。本調査で得られた結果は、地元で培われてきた健康知識の保存、地域社会への還元のために活用する。

